

国際交流のキーワードは “ピープル・ツー・ピープル”

現在、熊本には約四千人の外国人が暮らし、年に約十万人が海外へ出掛けています。経済、文化と国際交流の幅も広がり、その舞台も行政から民間へと移り、民間の国際交流・ボランティア団体もさまざまな活動を展開しています。“国際化”は今や各県民にとっても欠かせないものとなってきています。今回は、民間の国際交流・ボランティア団体の活動をおおして身近な国際交流について考えます。

中国広西壮族自治区、アメリカモンタナ州、韓国忠清南道との姉妹提携が十周年を過ぎ。昨年、今後の交流のあり方を協議するために四方国の知事が一堂に集まり、知事サミットが開催されました。一方、この十年の間に、県や市町村レベルの姉妹提携を足掛かりに、県民の国際意識も急速に高まり、民間の国際交流・ボランティア団体というかたちでも国際交流の芽が育ってきました。

現在、県内では百三十あまりの民間の国際交流・ボランティア団体が活動しています。昨年五月の国際交流週間でも「協賛イベント」に多数の団体が参加。元気なところをアピールしてきました。

県では、昭和六十三年に「熊本国際交流活性化連絡協議会」を設置。各種情報提供や相談、事業への補助金制度などにより、国際化を進めるうえで大切な民間レベルの国際交流を側面から支援しています。このほか、「くまもと21ファンド」でも、公益信託金の利息分が各団体が行うイベントなどの補助金として運用されています。

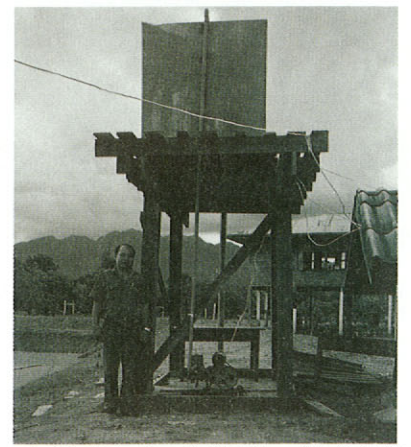


肥後ごまの色づけにチャレンジ。国へのおみやげにします

今回掲載の民間国際交流・ボランティア団体

- コミュニティ・ネットワーク協会 事務局(096)322-8385
- 「華友会」を支援 岩谷様方(096)337-0864
- ザ・フレンドシップ・フォース・オブ・クマモト 事務局(0968)73-3418
- 王栄幼稚園・国際交流委員会 事務局(096)363-4315
- いつわ国際交流協会 事務局(0969)32-2356
- 熊本YWCA国際部「留学生の会」 事務局(096)346-3419

バン・サケクラ小学校に井戸ができた!



コンケン県ブーバーマン地区バン・サケクラ小学校につくられた井戸から、学校農園に水を送る給水塔

コミュニティ・ネットワーク協会

「地域的(ローカル)な視野で、地球的(グローバル)に運動する。」アジアが私たちの活動の場です」と話すのはコミュニティ・ネットワーク協会の専務理事を務める山口久臣さん。同会は平成三年につくられ、現在会員は約八百人。野外活動部会、国際部会、地域づくり部会など七つの部会が互いに関係しあって、「自然」と「文化」という同会のテーマを追求しています。

書き損じた五十円ハガキには四十五円の価値があります。平成六年二月には、同会が窓口になり、集めた書き損じハガキの寄付で、バン・サケクラ小学校の地下水(井戸)工事が行われ、学校農園では井戸水を使い野菜を作っています。収穫した野菜を抱いて、うれしそうに笑う子供たちの輝く瞳が「忘れられなかった」



学校農園で収穫された野菜。これらの野菜は調理され、子供たちの給食になります

熊本が“故郷”になるまで

中国帰国青年の会「華友会」を支援

昭和四十七年、日中国交が回復。翌年から、中国残留孤児とその家族の帰国が始まり、現在、約百二十世帯、三百六十人が、熊本で暮らしています。一昨年、その二世たちが、互いに助け合っているところと「華友会」を発足させました。構成は小学生から社会人まで約四十人。月一回、大江公民館(熊本市)に集まり、近況を報告し合ったり、キャンプ、スポーツ大会などを開いて交流を図っています。

この会を陰ながらに支援しているのが、岩谷美代子さんたち四人。五年前、「中国帰国者対策協議会」からの派遣教師として、二世たちの日本語教育に当たったメンバーです。事業が終了した今も「彼らが一人前になるまで、もう少し見ていこう」。そんな気持ちで、会場へと足を運ばせます。もちろんボランティア。歯科医、会社員、語学教師とそれぞれ



「熊本国際交流活性化連絡協議会」で活動報告をする岩谷さん(左から2人目)

に仕事を持つているので、年休を使って参加することもあります。言葉、進学、就職、結婚と、二世の抱える問題は尽きません。交流会の段取りだけでなく、岩谷さんたちは、時には中学校の三者面談に出向いたり、青年たちの相談相手になります。今、県内では日本語教育を必要とする子どもたちの七五%が、中国語を母語とする子どもたちです。「日本人の英語教育も大切だけど、日本にきている外国人の日本語教育やケアも大切なのでは」と、行政の立ち遅れにもちよびり不満気。岩谷さんたちの「もう少し」は続きます。